芦名定道

前期：現代キリスト教思想研究１――近代から現代へ

オリエンテーション――現代キリスト教思想の諸動向
１．西欧近代とキリスト教
２．自由主義神学１――シュライアマハー
３．自由主義神学２――リッチュルとハルナック　5/9
４．自由主義神学３――トレルチ　5/16
５．ヘーゲルとヘーゲル主義　5/23
６．近代聖書学と宗教史学派　5/30
７．キリスト教と社会主義　6/6
８．弁証法神学１――バルト　6/13
９．弁証法神学２――ブルトマン　6/20
１０．弁証法神学３――ティリッヒ　6/27
１１．解釈学的神学とブルトマン学派　7/4
１２．研究発表　7/11
１３．研究発表　7/18
１４．研究発表　7/25

＜前回＞西欧近代とキリスト教

（１）ヨーロッパ文明の基盤―ヘレニズムとヘブライズム―

１．古代ギリシャ・ローマ文化（政治・経済・文芸）＋キリスト教（一神教）
これら二つの伝統・潮流の動的な相互作用の中から、「ヨーロッパ世界」が出現した。
２．ヨーロッパをそれの基礎にある動向・潮流・伝統の多元性において捉えようとする議論。その一つとしての「ヘブライズムとヘレニズム」という図式。
その変形　・ルネサンスと宗教改革　・キリスト教とヒューマニズム
５．「文化は宗教の形式(Form)であり、宗教は文化の内実(Gehalt)である。」（ティリッヒ「文化の神学」）
６．宗教１（文化の内実としての宗教）→ 宗教文化（宗教２）
↓　↑　協調・対立
→ 世俗文化
８．二重性の顕在化としての啓蒙主義：17 世紀までと 18 世紀以降
古プロテスタンティズム、新プロテスタンティズム
・自然神学的な絆（自然法を含む）の解体
→　自律思想と伝統（他律）の対立

（２）近代合理主義１

10. 近代科学（啓蒙的な実証主義的科学）、一次元的な還元主義
ニュートン（17 世紀）からニュートン主義へ（18 世紀）
12. 機械論的世界観への適応の試み：
理神論、合理主義的キリスト教→伝統の解体（神秘なしのキリスト教）
13. 合理性とは何か、合理性は単一か。rational と reasonable。
体系とは、真理とは何か。

（３）近代合理主義２

14. 自然主義と歴史主義→ドイツ古典哲学の課題、近代と伝統との調停

２．　自由主義神学１――シュライアマハー

（１）シュライアマハー(Friedrich Ernst Daniel Schleiermacher, 1768-1834)の特徴

①近代プロテスタント神学の父

啓蒙主義的な神学的合理主義と伝統主義との間・総合
同時に、近代解釈学の父、現代宗教学（宗教現象学）の父
②啓蒙思想とロマン主義の総合
カント・フィヒテ→　ロマン主義運動→　体系構想（神学－哲学）
ヘルンフート兄弟団　1796(29)　1810(42)
ハレ大学神学部（宗教的懐疑）　ベルリン　ベルリン大学神学部
1787(19)　『宗教論』(Reden)『モノローゲン』
③解釈学・弁証法・倫理学、体系家→信仰論（『信仰論』(Glaubenslehre)）
Dogmatik から Glaubenslehre へ
自由主義神学

（２）『宗教論』の信仰概念

『宗教論』(筑摩書房)
第一講　弁明
第二講　宗教の本質について
第三講　宗教へ導くための教育について
第四講　宗教における集団について　あるいは教会と聖職について
第五講　さまざまの宗教について

「宗教がまっさきに心情に語りかけてくるもっとも内面的な深みへ、きみたちを案内したいのだ」(17)、「人間存在の内面へ」(18)、「きみたちが軽蔑しているこれらの体系の中には、宗教は見出されないのだ」(22)、「完全にそれ自体で独立していなければならない」(28)、「宗教はまったく独自な役目を果たさなければならない」(29)、「宗教は、人それぞれのすぐれた魂の内部から必然的に、おのずと湧き出てくるということ」(30)、「宗教は形而上学や道徳と区別すべきである」(35)、「最高の存在者、あるいは世界についてのいろいろな意見[形而上学]と、一つの（いや、そればかりか二つの）人間生活に対する命令[道徳]のごた混ぜを、きみたちは宗教と名付けているわけだ」(37)、「宗教の本質は、思惟することでも行動することでもない。それは直観と感情である。宇宙を直観しようとするのである。宇宙の独自な、さまざまな表現、行動の中にひたって、うやうやしく宇宙に聴き入り、子供のように受け入れる態度で宇宙の直接の影響にとらえられるよう、宇宙に充たされよう、とする」(42)、「宗教は無限なものを受け入れる感性、趣味である」(44)、「高次の実在論」(45)、「直観するとは、直観されたものが直観するものへ及ぼす影響、すなわち、直観されたものの根源的、独立的な動きに基づいている」(46)、「すべての個体を全体の部分として受け取り、すべて制約されたものを無制約的なものの表現として受け取る、これが宗教である」(46)、「世界におけるすべての出来事を神の働きと考えること、これが宗教なのだ」(48)、「すべて存在するものは、宗教にとっては、真実な、それなしではすまされない無限なものの象徴なのだ」(54)、「あらゆる直観は、その本性から感情に結び付くのである」(54)

１．信仰・宗教の規定
意図：宗教の独自性－宗教学の基礎、宗教哲学
宗教多元性の問題（第五講）
２．形而上学・倫理学との区別
宗教の本質について（宗教本質論・第二講）→「直観・感情」(「本質－現象」の枠)
1)直観と感情
2)形而上学と道徳

3) 直観：有機体的な統一的な宇宙、スピノザ的
無限と有限：表現、象徴
4) 感情「それは多様性と個性とを象徴にした無限で生きた自然という根本感情」「無限に向かう憧れ、無限に対する畏れの心」
「聖なるあこがれ」「内なる本性の呼び掛け」

３．思想史における位置づけ
近代的な宗教研究の広範な領域に対して、その起点となった。
①宗教・信仰の直接的場へ「感情」「直接意識」 → 宗教現象学へ
②人間性における宗教 → 弁証神学、宗教の本質概念（本質論から現象論へ）
③「感情」から「認識」「行為」へ → 人間の存在構造における宗教性
これは、信仰を精神の諸機能の一つの特定機能としての知性、意志、感情のいずれかと同一視することの不十分さを意味する。むしろ、これらの諸機能を統合した人間精神（人間理性、人間存在＝実存、人間性）における本質的な可能性として宗教・キリスト教を理解すること、その上でその特殊な実現としてのキリスト教的信仰の意義を論じすることが、要求される。
体系的哲学構想（『弁証法』）に裏打ちされた宗教論
方法論としての解釈学の構築
④実定性 → 個別的で歴史的な諸宗教への定位 cf. 理神論
高次の実在論
説教者
↓
自由主義神学の父、しかし自由主義神学の枠には収まらない。

（３）『信仰論』の意義

４．教義学の新しいスタイル
・経験から教義へ
・諸学の体系内における神学の位置づけの明確化
倫理学、宗教哲学、弁証学からの借用命題から神学本論へ
「神」という言葉の規定

５．『信仰論』序説（Einleitung）
「§２ 教義学は神学的学科であり、それゆえもっぱらキリスト教会と関係しているのであるから、それが何であるかを説明することが可能になるのは、キリスト教会の概念について了解されている場合に限られる。」（Schleiermacher,1830, 10）
「§３ すべての教会共同体の基礎である敬虔さは、それだけで純粋に考察される場合、知や行為ではなく、感情の、あるいは直接的自己意識の規定された形態なのである。」（ibid., 14）
「§４ 敬虔さの表出はたとえどんなに多様であっても、敬虔さを他のすべての感情から区別することを可能にする敬虔さの諸表出すべてに共通なもの、つまり敬虔さの自己同一的な本質は、次の点に存する。すなわち、それは、我々が自らを絶対的に依存的であると意識していること、あるいは同じことであるが、我々が自らを神との関係性において意識しているということである。」（ibid., 23）

６．シュライアーマッハーの議論
「教義学・教義→教会・信仰共同体→敬虔さ→感情・直接的自己意識→絶対的依存感情」
①教会概念、つまり敬虔さの分析は、倫理学からの借用命題によって行われる。
倫理学：自由な人間の行為によって成立する共同体、あるいは人間の生の全領域を対象とする学問

教会概念の分析：まず教会的諸共同体の基礎にある自己同一的なものと諸現象において可変的に振る舞うものとを分離し、次に多様な現象の全領域を諸現象間の類似性と段階に従って区分し、最後に歴史的に発見される個々の共同体（共同体の本質の個別的な形態化）が位置づけられるべき場を明らかにする（Schleiermacher,1830, 12f.）。

教会共同体の本質と歴史的諸現象とが学問的な仕方で把握可能になる。

②教会共同体の概念は、敬虔さ（Frömmigkeit）、感情（Gefühl）・直接的自己意識（das unmittelbare Selbstbewußtsein）に帰着する。

・教会共同体の基礎（教会共同体の自己同一的な本質）＝敬虔さ：感情という観点から規定される。感情とは意識の「状態」（Zustand）である。この意識的状態には「直接的」という規定が付与されている。

「直接性」：自己意識が表象（自己イメージなど）によって媒介され対象化されたものではないということ（直接的自己意識）。

例えば、すべての思惟や意欲が何らかの仕方で形態化された意識の背後へと退くような瞬間にも、そこに持続しているこの形態化された自己意識が、あるいはまた一連の思惟や意欲が継起する間においても変化することなく持続する自己意識の規定された形態（ibid., 16）。

つまり、感情とは個々の変動する心理的情動や表象ではなく、生あるいは自己意識の根底において持続するもの（個々の現象が生起する場）。存在論的な概念。

・生（das Leben）：自己同一性の保持と自己変化の二重の運動の弁証法的統合（交代、Wechsel）（ibid., S.18）。

認識：受動性（触発）に基づく一つの行為（認識行為）、「自己にとどまること」（Insichbleiben）と「自己から踏み出すこと」（Aussichheraustreten）という主観の二つの形式は密接に結合。

本来的な行為（認識から区別された実践理性の事柄）：「自己の外に踏み出すこと」

感情：「自己にとどまること」という契機。

↓

・感情（直接的自己意識）は、生の弁証法において能動性がまだ現実化せず受動性のみが現れている状態、つまり、生の弁証法の起点であり、また生の運動が常にそこへ立ち戻る終点。「自己にとどまること」（自己同一性の保持）は、固有の意味においては感情に属している。認識や行為に対する感情の根源性。

③感情は自己・人格的統合の一要素である。

「認識、行為、感情に対する第四のものは存在しない」（ibid., 17）。認識、行為、感情の三者の統一性（あるいは「自己にとどまること」と「自己から踏む出すこと」の二者の統一性）について考える場合にも、それは三者に対する第四の構成要素としてではなく、自己自身の本質、これらの三者の共通の根拠として理解されねばならない（ibid., 18）。

この本質・根拠：認識、行為、感情の人格的統一性に相当する。

④認識、行為、感情は感情を基盤とした動的な相互連関において統合されている。

・敬虔さの固有の座としての感情：認識や行為から明確に区別され、認識や行為から導出されない（cf.『宗教論』）。

この区別を前提に、次の段階において、三者の動的な関係性と統合性が問われねばならない。

・三者の構造的関係と動的関係の両面（ibid., 19-23）。

敬虔さは認識と行為を刺激することによって両者を媒介し、あるいは自らのうちに両者を萌芽として含むことによって、認識や行為とともに生の統一性を構成。「敬虔さは知識と感覚（Fühlen）と行為とが結合した状態」（ibid., S.22）。感覚を知識から、

あるいは行為を感覚から一方的に導出することはできないが、三者の間には相互の移行プロセスが存在する。

敬虔さは、知識と行為を媒介する自己意識の形態であって、これを介して知識から行為への、あるいは行為から知識への移行・運動が生成する(ibid., 23)。

⑤自己意識の現象学的記述と自己意識の「受動－能動」構造（ibid., 24f.）

・自己意識の記述・分析（倫理学からの借用命題、内容的には、自己意識の現象学的記述）
感情あるいは直接的自己意識と生の統一性・動態との関わりから、「絶対的依存感情」へ。

・自己意識を構成する契機：
自己措定性(Sichselbstsetzen)・存在すること(ein Sein)／
自己非措定性(Sichselbstnichtsogesetzthaben)・何らかの仕方で生成したこと（Irgendwiegewordensein）
↓

・意識の二重性：自らが現に存在していることを意識するとともに、他者に依存しつつ、他者と共に存在していること(Zusammensein)を意識。
主観における自発性（Selbsttätigkeit)と受容性(Empfänglichkeit)の二重性に対応。

・受動性の優位：自己はまず他なるものからの作用・触発によって自己として存立する。
自己意識にとって第一のもの（das erste)、より根源的なものとは、自発性の契機ではなく、他なるもの（外部）から何らかの仕方で触発されるという受容性の契機である、活発な自己活動的な行為を伴った自己意識でさえもこの受容性によってあらかじめ方向付けられているということ（ibid., S.25)。

⑥感情は、自由感情(Freiheitsgefühl)と依存感情(Abhängigkeitsgefühl)の両極性を持つ。

主観・自己において受容性を自発性よりもより根源的な要素として位置づけ、自己の存在とそれについての意識が他者との関係性を基盤にしていること。

cf. 近代的自我の能動性の強烈な自覚.

(1)自由感情や依存感情は直接的自己意識に属している。
これらの感情は、自己像を介した自己の対象化に先立つ、自己の諸活動・諸機能の統合性における意識の動的生成のレベルの事柄。そのまま個別的な感情の前提。
シュライアーマッハーの絶対的依存感情を心理主義的に解釈するのは間違い。

(2)依存感情と自由感情は自己意識において両極を形成しており、相互に不可分である。
依存感情のみ、自由感情のみといった状態は、世界内の他者との関わりに関する限り、自己・主観においては、存在しない。
主観と他者（主観と共に措定された他者）との相互作用
→ 自由感情と依存感情との不可分性。
世界内には絶対的自由感情も絶対的依存感情も存在しない(ibid., S.26)。存在するのは、相対的自由感情と相対的依存感情にすぎない。

⑦自己意識の現象学は、他なるものとの関わりを介して、現存在の現象学へと展開される。

・自己意識の分析＝世界の内における自己の存在の在り方、我々の現存在の分析へと至る。
自己意識の構造の現象学的記述から、世界内における現存在の現象学的記述へ。

・世界：
自己の存在は他から触発された受容性において成立し、常に他（人間的社会的関係や天体を含めた自然との関係）との相互作用の内に存在している。
もろもろの他なるものが一なるもの(Eines)として、つまり外部世界全体が我々自身と共にある一なるものとして措定されるとき、それは世界と呼ばれる（ibid., S.26)。
↓
我々の自己意識は世界の内における我々の存在の意識、あるいは我々と世界との共存在の意識として成立。

注意すべき点：２０世紀の現象学的存在論（シェーラー、ハイデッガー、ティリッヒらを含めた）と表面的に類似性。自己意識が「我々」の意識として説明されていること。個的自己の意識ではなく、共同体的自己の意識が論じられている。

↓

シュライアーマッハーの信仰論が彼の言語論やコミュニケーション論との関わりで理解されねばならない。 cf. フッサール的な意識の現象学

⑧自己との相関性において、自己の起源は神として定義される。

・世界内の他者との関係：ここには絶対的依存感情は存在しないこと。

・敬虔さ＝絶対的依存感情：自己と神との関係。

しかし、特定の神観念 ── たとえ人格神であろうと ── を前提にしていない。

「我々の自己意識において共に措定された、我々の受容的で自発的な現存在の起源（Woher）は、神という表現によって言い表されねばならない」（ibid., S.28f.）。

まず、特定の神観念から、その神が現存在の起源であると主張するのではなく、むしろ反対に、現存在の起源の方が「神」と呼ばれるのである（神の定義）。

自己の起源で問われる存在者：自己・主観が相対的な自由を意識できるような世界内の何か（あるいは世界自体）ではなく、それを前にしては自己の存在の依存性のみが意識されねばならない何か。オットーの言う聖なるものと被造物感情、それを表現するのに、「神」という言葉がふさわしいという議論。

＜文献・参考文献＞

１．シュライエルマッハー『宗教論』岩波文庫、筑摩書房。

Über die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern (PhB 255).

On Religion. Speeches to its cultured despisers

(translated by Richard Crouter, Cambridge University Press, 1988).

Schleiermacher（1830）: Friedrich Schleiermacher, *Der christliche Glaube nach den Grundsätzen der evangelischen Kirche im Zusammenhange dargestellt*（1830/31, hrsg.v.Martin Redeker）, de Gruyter 1960

２．ティリッヒ『キリスト教思想史Ⅱ』（『ティリッヒ著作集』別巻３）白水社。

３．波多野精一『宗教哲学』『宗教哲学序論』『時と永遠』岩波書店。

４．武藤一雄『神学と宗教哲学との間』創文社。

５．プレーガー 『シュライアーマッハーの哲学』玉川大学出版部。

６．ジェームズ・デューク、フランシス・Ｓ・フィオレンツァ

『シュライエルマッハーの神学』YOBEL, Lnc.

「リュッケへの第一の手紙」「第二の手紙」邦訳所収。

７．武安　宥　『シュライエルマッハーの教育学研究』昭和堂。

８．川島堅二　『Ｆ・シュライアマハーにおける弁証法的思想の形成』本の風景社。

９．大峰　顕編『神と無』（『叢書ドイツ観念論との対話』［５］）ミネルヴァ書房。

10. 芦名定道「ティリッヒとシュライアーマッハー」、『ティリッヒ研究』（現代キリスト教思想研究会）第２号、2001 年、pp.1-17。

https://sites.google.com/site/kyotochristianstudies/home/tillich/journal

11. 川島堅二氏のサイト：http://religion.sakura.ne.jp/schleiermacher/

日本シュライアマハー協会：http://www1.doshisha.ac.jp/~sgjapan/

高森昭論集：http://www1.doshisha.ac.jp/~sgjapan/archive/takamori.html

水谷誠論集：http://www1.doshisha.ac.jp/~sgjapan/archive/mizutani.html